四旬節第５主日　　**大和高田教会のお知らせ**　　**2024 年３月 17 日**

ミサ前の祈り【能登半島地震で被災された方々のために祈りましょう】

震災で亡くなったすべての人を、あなたの安息にあずからせてください。
また、今なお不安と困難のうちに避難生活を送る多くの人に、 力強いみ手を差し伸べてください。
心も体も疲れ果てた人々に、再び立ち上がる力が与えられますように

ミサのお知らせ (2024 年３月)

主日のミサ	３月３日、17 日、24 日（日）	(10：30)
平日のミサ	３月７日、14 日、21 日（木）	(10：30)
	３月 28 日(木)の平日ミサはありません	
ベトナム語ミサ	３月 10 日	(15：00)
聖木曜日	３月 28 日（木）	（20：30）
聖金曜日	３月 29 日（金）	（19：00）
復活徹夜際	３月 30 日（土）（ミサ中に洗礼式があります）	（20：30）
復活祭	３月 31 日（日）	（10：30）

京都教区

＊３月 20 日(水・祝)10 時から、京都司教座聖堂 カトリック河原町教会にて、ライムンド出水 洋（でみずひろし） 助祭の司祭叙階式があります。お祈りください。

＊京都司教区主催の済州教区「聖母の夜」巡礼旅行の案内が来ています。日程は５月 22 日～25 日の３泊４日です。詳細はホール掲示板をご覧ください。

奈良ブロック

＊コロナ後の典礼対応についてのお知らせです。
・聖体拝領について、以前のように司祭が「キリストのからだ」と唱えて授け、信者は「アーメン」と答える。
・聖堂入り口の聖水は当面の間使わない。

大和高田教会

＊2024 年度の司祭司牧者人事異動(４月１日付)がありました。奈良ブロック関係では、大和高田教会司祭館にお住まいのブルース神父様が三重南部ブロックに異動となりました。寂しくなりますが仕方ありません。ついては４月７日(日)ミサ後、送別会をします。ミサ司式はブルース神父様です。ご参加ください。

＊ミサ前に新しいミサ曲の練習をしています。教会には少し早めに着くようお願いします。

＊国際協力委員からのお知らせとお願いです。政府が今国会において、永住者に対する在留資格取消し制度を含めた入管法改正案を提出、審議予定ということに対して移住連(移住者と連帯する全国ネットワーク)は、２月９日に反対声明を出し、反対署名活動を開始しました。 国際協力委員が署名のご協力をお願いしますので、ご理解の上宜しくお願いします。

＊典礼部より、３月 23 日（土）10：00 より、枝作りと飾り付けを行います。典礼部員の方、お手伝いいただける方はお集まり願います。

３月１７日 四旬節第５主日 ヨハネ１２章２０節～３３節 一粒の麦はこの世に命を与える

四旬節も第５主日を迎え、いよいよ来週から聖週間が始まります。今日の福音も受難に向かう内容となっています。ギリシア人がイエスに会うことを願うことから始まります。

ギリシア人は異邦人であり、異教徒です。イエスの父である神を知らない彼らがイエスに出会いたいと思ったのは、異邦人にも救いが及ぶことのしるしであると考えられます。そこでイエスは「栄光を受けるときが来た」と言われたのではないでしょうか。もちろんこの栄光はイエスの受難を経て与えられるものです。弟子たちは異邦人がイエスのもとに来たのを見て、いよいよこの世の王となる日は近いと思ったかもしれません。そこでイエスは「一粒の麦」のたとえを語られます。

「地に落ちて死ぬ」とは、土に蒔かれることを表しています。実際は死ぬのではなく生きて育つのですが、イエスは自分を麦にたとえるためにあえて「死ぬ」という表現を使われたのでしょう。また、土に埋もれる麦は死後墓に葬られることを連想させます。いずれにしても、麦は土に落ちなければ実ることはできません。蒔かれること、つまり死ぬことによって多くのいのちを生み出すのです。

ここで「タラントンのたとえ」あるいは「ムナのたとえ」を思い起こしてみましょう。いずれもあずかったお金を使わなかった人は主人から叱られます。でも彼らはなくさないように大事にとっておいた人です。おもしろいことに、「タラントンのたとえ」では土に埋めておいた人が叱られますが、麦や種なら育つこともあったでしょうに、残念ながらお金は芽を出しません。いつまでもそのままです。これらのたとえは「神から預かったものをちゃんと使うように」という教えですが、一粒の麦も大事にとっておいたら生かされないことになります。一粒の麦はもちろんイエスを表しています。イエスは十字架上で死ぬことによってすべての人のいのちを生かされました。ここに神の救いがあります。

そしてイエスはそのような一粒の麦のあり方を、わたしたちにも求められます。それが「自分の命を愛する者はそれを失う」「この世で自分の命を憎む人は永遠の命に至る」という教えに表れています。

わたしたちにとって、神から授かった命を大切にするのは当然のことです。それを憎むとはどういうことでしょうか。「憎む」ことは否定することではなく、自分の人生だけを大事にする生き方を変えるということです。また、この世の命を越えた永遠の命があることを信じるように教えられているのではないでしょうか。

このようなイエスの教えをもとに、教会ではこの世のものを汚れたものとして否定し、死後の世界だけを求めて生きることが理想であるという考え方もありました。しかし、神の国はこの世に来るものです。わたしたちの分まで命をささげてくださったイエスの愛を思いながら、この世にある神の国の芽を見つけて歩むことが大切です。

（柳本神父）